

## 第27回アルビオン賞について

第27回アルビオン賞は、生駒夏美、金澤哲、メドロック麻弥、横内一雄の4名から成る選考委員会による慎重な審査の結果、審査対象論文4編の中から、野末幸子氏の「“Roman Fever”における言葉の応酬」(*PHILOLOGIA* 54 三重大学英語研究会[2023])に授与されることとなった。

野末氏の論文はイーディス・ウォートンの短編を精読しながら、作品末尾のパンチライン的個所について、あえて曖昧性を導入することによって、短編全体の新たな解釈の可能性を提示したものである。氏の解釈は、ウォートンの短編にジェイムズ的なひねり・アイロニーを見出すとともに、虚実定めがたい世界の中で特定のストーリーを引き受けて生きざるをえない人間の本質まで示唆するものである。

審査においては、テキスト全体を丁寧に読み新解釈につないでいる点、また短編を扱いながら人間の本質におよぶ結論にたどりついている点が、高く評価された。

一方、今後は対象および視野を拡げ、さらにスケールの大きな論を期待するという点においても、委員の意見は一致した。その際には、ジェンダーをはじめとする社会的・政治的観点にも目を背けることなく、昨今の批評動向も踏まえたより戦略的な意図をもった研究を期待したい。

付言すると、今回審査対象となった論文は、すべて精読中心・テキスト重視のものであった。それは京大英文学会の伝統が健在である証拠であるが、それだけでは現代の文学研究としては、視野が狭いと言わざるを得ない。今後はテキスト精読の伝統を生かしつつ、国際学会にも広くアピールするための戦略をもった研究が生まれてくることを期待したい。なお、アルビオン賞選考規定に従い、野末氏の論文を本号に転載した。